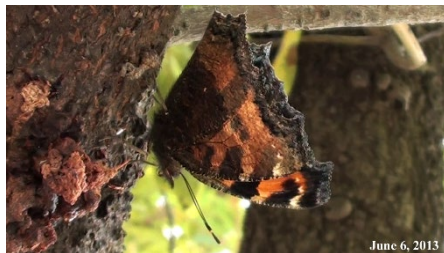


ヒオドシチョウは西畑や松波町では見かけることが少ない珍しいチョウだが、幼虫がエノキの葉っぱを群れとなって食い尽くす習性があり、エノキは高砂小学校の大樹をはじめ近くにくらでもあるので、気づかないうちに身近で発生する可能性は十分ある。実際、2007年6月、高砂幼稚園の運動会当日、子供たちが走り回るトラック地肌ヒラリと舞い降りてきて、きれいな緋緘ひおどし (=武者が身につけた緋色の甲冑)色を惜しみなくみせながら悠然と水分を吸い始めた、実に肝っ玉の大きいこのチョウを目にしたことがある。

ヒオドシチョウは5月中旬から6月上旬にかけてとても美しい新鮮個体が羽化して活動を始め、クヌギなどの樹液が大好きで、2013年6月にはタブノキの樹液を吸う光景を記録できた。越冬後以外にはあまり花には来ないが、加古川市平荘湖の岩山でアセビに似たネジキの花蜜を求めている光景に出くわしたことがある。終令幼虫まで群生し、ほぼ同じ場所でいっせいに蛹となる習性がある、それらがチョウとなればあたり一面に飛び交うはずなのに、幼虫が群生する習性があるとなつて寄生バエにやられる確率が高く2割も羽化すればいい方である。しかも羽化後は離散してその行動範



May 25, 1997 高知市五台山公園



囲も広く、身近に複数のヒオドシチョウを見ることは稀となる。もっとも、自然が豊富に残る北海道富良野などでは密生するヤナギ類を食べて育った個体が、林道路面でも複数頭競うように吸水している情景に出会える。羽化後に遠くにいかなくてもいい環境がすぐそばにあるからだと思える。富良野では観光客であふれる広大なラベンダー畑に飛来して、夢中でラベンダーの蜜を吸うヒオドシチョウを見たことがあるが、6月に花蜜を求める例は少ないと思われる。

このチョウは暑さが苦手な鹿児島島の北部が分布の南限。5月下旬から6月の短期間元気に飛び回ったあと夏場になると休眠に入り多くはそのまま越冬するようだが、11月上旬の暖かい日中に日光浴を楽しむ姿を加古川市志方町で見たことがある。長期間どこでどんな状態で休眠しているのか観察例はほとんどなく、春に再び活動を始めるときには、写真①のように多くが羽の外縁がみごとにボロボロに傷んだあわれな姿となるが、なぜか♀は♂にくらべて傷みが少ないという文献記載がある。写真②はキタテハと落葉を囲んで「今年の春は暖かくていいね」などと仲良く語り合っているかのようなほのぼのとした光景の記録で、損傷が少ないのでこれは♀だと思われる。ヒオドシ



シチョウの羽の衰れさはアカタテハ、ルリタテハ、キタテハなどが越冬後にほとんど無傷であることとあまりに差があり、相当に異なる厳しい越冬条件を耐え忍んだせいだと考えられる。スダジイの根元空洞で越冬していたという観



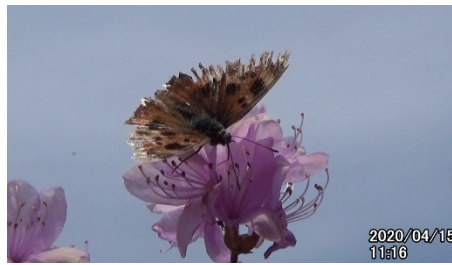
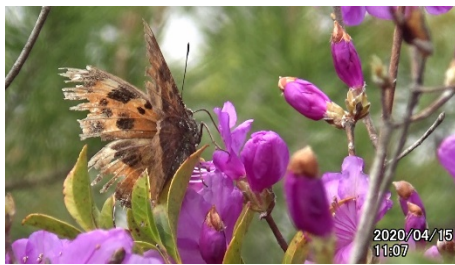
察記録があるようだが、羽がひどく損傷する理由は不明のままである。

ここまでの記述ですでに気がついた方もいるかと思うが、**ヒオドシチョウは約1年の長生きをするチョウ**で、越冬後に初めて交尾をし、エノキの新芽が出る頃に数十個から200個ほどを塊状に産卵をすることが知られている。早春、カサカサという乾いた羽がすり合わさる音をたてながら日あたりのいい小高い山頂の広場でルリタテハ同様の占有行動をみせ、越冬後の個体はサクラの花蜜を求めたりもする。岩場で日向ぼっこをする写真①の撮影時には「冬場をよく耐えたね」と本当にいとおしくなった。

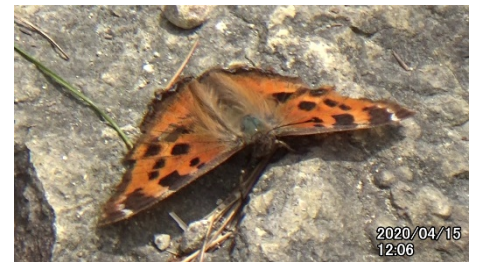
Apr. 15, 2020 岩山の尾根道で

毎年、コバノミツバツツジが多い岩山ピークの尾根筋へと軽登山をしていて、今年初めて行ってみる。急峻な岩道をほとんど休みなく登って15分を要して尾根への到着は10時半。標高132mの基準石柱にサトキマダラヒカゲが静止している。撮影記録がとれなかった珍しい光景として、たぶん越冬個体だと思えるヒメアカタテハがツツジの花蜜を吸っているのを観察できた。左前翅がかなり破損した個体で、この個体はそのあと、数十メートルはなれたツツジの花にもやってきていたが、ヒオドシチョウがちょっかいを入れたため、二度目も撮影記録がとれなかった。

尾根筋にはキタキチョウやミヤマセセリもやってくるが、この日に一番多く見たのは越冬明けのヒオドシチョウで、珍しく時間をかけてツツジの花蜜を楽しむ個体が出て、忙しくストローを

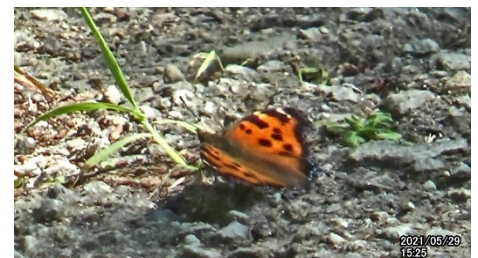
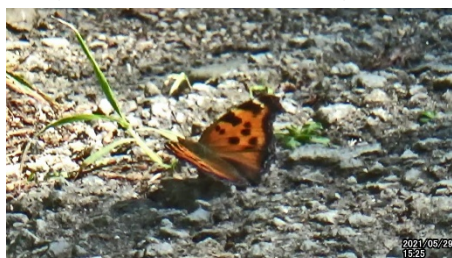


差し込む様子をたっぷりと撮影記録できた。翅を相当傷めた個体は♂だと思われる。路面で日向ぼっこを楽しむ個体も複数いて、♀は♂にくらべて翅の傷みの程度が少ないことがナゾとされるチョウだが、本日出会えたなかに♀がいたかどうかはよくわからない。



May 29, 2021 久しぶりのヒオドシチョウ

テニスの合間にヒオドシチョウを観察しながらきれいな翅表の記録が取れなかったことから、午後、新鮮個体との出会いが期待できる小高い山へと出かけてみる。期待した山頂部の空き地には子供たちがいてチョウはいなく、別の道をたどると期待したヒオドシチョウが前方の路面できれいに翅を広げて止まっている。離れた位置からとりあえず望遠撮影をして画像を確保し、少しずつ近づくと、当方の気配ではない自発的



な転飛で、湿り気が多い地面へと移って吸汁し始める。こういう状況ではすぐに飛び立つことは少ないことから、可能な限り接近してビデオ撮影に専念する。ときどき影となった部分へと移動するため、鮮やかな緋絨色が陰ってしまうが、一連の撮影記録から静止画像として満足のいく記



録を抽出できる。